

大伴家持と天皇制

大伴家持（おおとものやかもち。718?~785年。以後年号は西暦で記す。）は、大伴旅人（665?~731）の子である¹⁾。旅人は、武門の名族に生まれ、720年3月、征隼人持節大將軍として南九州の隼人の乱を鎮圧した²⁾。また、旅人は当時、山上憶良と並んで歌人として名高かった³⁾。伊藤博（いとうはく）は、万葉集の「形成に直接かかわったのは、万葉末期を代表する歌人大伴宿禰家持であったと推察」する⁴⁾。

749（天平21）年、当時は日本では産出しないと考えられていた金が、陸奥國小田郡で900両も産出した。大仏の全面に鍍金するための金の調達の見通しがつかず、気弱になっていた聖武天皇は、この報告に喜び4月1日、東大寺廬舎那仏の前殿に出御し、詔書を発し、恩命を降した⁵⁾。

白川静は、旅人の没から家持の死（785年）迄の大伴家持の事績を記している⁶⁾。これによると、聖武天皇は749年、上記の詔書の中で、特に、大伴氏、佐伯氏について、次のように述べた⁷⁾。

大伴・佐伯の宿祢は、常も云ふ如く天皇（すめら）が朝（みかど）守り仕（つか）え奉（まつ）る事顧（かへり）みなき人等（ひとども）にあれば、汝（いまし）たちの祖（おや）どもの云ひけらく、海（うみ）行かば水漬（みず）く屍（かばね）、山（やま）行かば草（くさ）むす屍、王（おほきみ）のへにこそ死なめ、のどには死なじと云ひ来（く）る人等（ひとども）となも聞（きこ）し召（め）す。……此の心失（うしな）はずして、明（あか）き浄（きよ）き心を以（もち）て仕（つか）へ奉（まつ）れ……

天皇のこの言は、家持を感激させ、家持は天皇の言に「かえり見は せじ」を付け加えた。

海（うみ）行かば水漬（みず）く屍（かばね）、山（やま）行かば草（くさ）むす屍、王（おほきみ）のへにこそ死なめ かえり見は せじ

要するに、家持は天皇直属親衛の武門としての大伴氏の伝統を誇り高く詠ったのである⁸⁾。

万葉集の集成について、伊藤は、次のように記している。

万葉集20巻の集成は、延暦3年（784）、家持が時節征東軍將軍として陸奥（みちのく）の多賀城に赴き、翌年8年、おそらく都で他界する直前の、桓武朝初期（781-785）にもとめるのがぶなんであろう⁹⁾。

しかし、天皇の武門の雄としての大伴家持の地位と万葉集の歌集としての地位は、盤石ではなかった。

この20巻本の主役たちは、延暦4年（785年）の9月、に罪人にされた。桓武天皇の片腕となって長岡京遷都などの施推し進めていた藤原種継が暗殺されたのであるが、捕らえられた者の自白から、事件の首謀は早良親王と春宮太夫家持であったことが判明したからである。家持が他界してから26日後のことで、家持は生前の官位や姓（かばね）を剥奪され皇太子は死に追いやられた。このため、万葉集は罪人の書として忌（い）まれ、菅庫の片隅に放置されることになったらしい。

けれども、やがて、家持も早良親王も赦される時が来た。大重元年（806）の3月17日、桓武天皇いまわの時の詔（みことのり）は、家持の官位を復し、早良のために読経せよという内容であった。この遺詔によって、万葉集は実質的によみがえったと言ってよい……¹⁰⁾

しかし、経過は1、2稿を以て到底論じえないが、周知のように第二次世界大戦後、日本国憲法が1946年11月3日公布、翌年5月3日施行された。その第一条は「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く。」としている。

天皇制をどの程度に、過去の弊害を縮減したものとして容認してゆくかは、ひとえに主権者国民の総意にかかっている、

注

1) 京都大学文学部国史研究室編、日本史辞典、東京創元社改訂増補版、昭和29年、65頁。

2) 同前書同頁、及び、編集委員・宇野俊一ら8名、日本全史ジャパン・クロニク、講談社、1991年、119

頁。

3) 前掲・日本全史、122 頁。

4) 株式会社 KADOKAWA、2009 年発行「新版 万葉集 四」現代語訳付き、伊藤博・訳注、314 頁。

5) 小西四郎他 3 名総監修「読める年表・日本史」1990 年、自由国民社 155 頁。白川静「後期万葉論」2002 年、中央公論新社・中公文庫、310 頁

6) 白川前掲書 257 - 331 頁「第六章 家持の軌跡」

7) 前掲書 310-311 頁。なお「大伴……の宿祢」にある「宿祢 (すくね)」は、「古代の姓 (かばね) の一つ。古くは人名につけた敬称であったが、天武 13 (684) 年の八色の姓 (やくさのかばね) 制定で第 3 位の姓となった。主として従来、連 (むらじ) 姓をもつ者に賜与され、真人 (まひと)、朝臣 (あそん) に次いで高位を占めたが、奈良時代後半以降になると、出身を問わず、功績などのあった氏などに与えられるようになった」(ブリタニカ国際大百科事典 <https://kotobank.jp/word>、2021 年 2 月 23 日閲覧)。

8) 白川前掲書 310-311 頁。

9) 白川前掲書 312 頁。

10) 伊藤博「万葉集 四」317 頁

オリエント